

地質家の見た小アジア史の断片

太田 英 順 (北海道支所)
Eijun Ota

現在トルコ共和国のある小アジアにいつごろから人が住み始めたかは定かでないが、コンヤ市東南のチャタルフックには9000年前のものといわれる新石器時代の集落跡がある。このように古くから人が住んでおり、その後の世界の歴史を通じて小アジアが常に争奪の対象となる土地であり続けたのは、ここがヨーロッパ・アジア・アフリカの3大陸の繋目、エーゲ海・マルマラ海・黒海・地中海に面する交通の要地であり、それに加えて気候条件も良かったためであろう。しかし、地質家は地質条件と人の歴史に特に興味をそそられる。ここでは独断と偏見に満ちた地質家が当地の歴史と地質条件の関係を勝手に解釈するとどうなるかを紹介したい。

<石灰岩・大理石> 古代ギリシャ人は小アジアの各地に移り住み、数多くの遺跡を残している。本場ギリシャに匹敵する大理石の大遺跡もトルコのエーゲ海から地中海沿岸にかけて特に多く分布している。これはこれらの地がギリシャとエジプト間の交易上便利な場所であり、気候も温暖で農産物も豊富であったためであろうが同時に彼らにとって建材であり彫刻の材料でもあった石灰岩・大理石がこれらの海岸線に沿っていたるところに膨大に分布していることも見逃せない要因であろう。

おおまかに言えば、この大理石は中生代のテーチス海に堆積した石灰岩がヨーロッパ・アジアプレートとアフリカ・アラビアプレートとの衝突により陸上に押し上げられたものである。つまり、大陸間の地質的關係が人類の歴史的關係にまで影響を及ぼしているのである。エーゲ海沿岸のトゥルワ(トロイ)はホメロスの叙事詩とそれを事実と信じたジュリーマンによる劇的な発見であり、ここにも有名である。ここはエーゲ海沿岸の青銅文化の中心であったが、トロイ付近には大理石資源が少ないため、日干煉瓦などを主建材とした遺跡は同じエーゲ海沿岸で、より南方にあるペルガマ・エフェソス・ディディムや地中海沿岸のベルゲ・シデなどと比べると華やかさに欠ける。一方、地中海沿岸アンタルヤ市の西北にあるテルメッソスの遺跡は石灰岩の山の中にある。建材資源そのものの上であって、城壁の修理などが容易である上、地形そのものが天然の要塞となっている。このおかげで紀元前4世紀に疾風の如く小アジアを通過したアレキサンダー大王の攻撃にも耐えぬき、一時は15万の人口を有したという。これほど端的ではないにしても石灰岩の山のあるところにギリシャ・ローマ時代の遺跡がある例は多い(写真1)。



写真1 石灰岩の山を背景とした地中海沿岸アナムールの遺跡

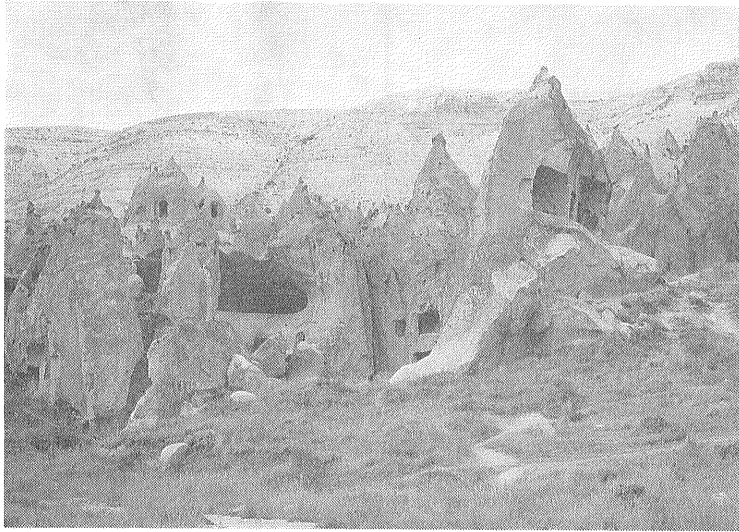


写真 2 カップドキアの奇岩とそれをくり抜いた住居

＜凝灰岩＞ アンカラ市東南方のカップドキアは侵食作用のいたずらによる奇岩地形(写真2)でよく知られているが、この名は紀元前にこのあたりに存在したカップドキア王国に由来する。この地形は付近の比較的新しい火山から放出された厚い凝灰岩層が半乾燥気候の程長い侵食力により削られて形成されたものである。7世紀以降イスラム教徒の迫害を受けたキリスト教徒にとってこの地方は良い隠れ場所であった。彼らは他の岩石に比べて軟らかく加工しやすい凝灰岩をくり抜き、教会・礼拝堂・住居などを作ったのである。侵食地形の発達していない所では凝灰岩の岩盤を掘り抜き巨大な地下都市を幾つも作った。大きなものでは6万人もの人口を有したという。まるで巨大な蟻の巣である。これらの都市は出入口と換気・採水用の穴以外は完全に地下に隠れており、各所に抜け穴や石の扉がある迷路のような構造を持っているため、侵入者は中に入ることを諦めざるを得なかっただろう。これが日本であれば水責めという手があったかもしれない。地下では夏は涼しく冬は暖かいので気温の年較差・日較差共に烈しいアナトリアではなかなか快適な住居であっただろう。

＜温泉＞ イズミール市東南方のパムッカレはトルコ語で“綿の城”を意味する。その名のとおり綿花の様に純白な石灰華が積み重なって階段状のシンターを作り、それぞれが湧き出る温泉水を満たしているため、白と青のコントラストが美しい千枚田のような観を呈している(写真3)。この付近一帯は石灰岩地域であると同時に第三紀以降の火成活動に関連した地熱地帯でもあるから地質構造線が通っているこの場所にこのような自然の芸

術品が作られたのもうなずける。トルコには同様の条件を備えた地域が多いため温泉沈澱物がいたるところに有るが、規模・外観共にこれほど見事なものは他に見あたら無い。ここには紀元前2世紀にベルガモン王国により築かれたヒエラポリスの遺跡があるが、円形劇場の他に巨大な浴場や給温水設備などの遺跡があり、天然の恵みを積極的に利用していた形跡が見られる。当時は王国の保養地として賑わったのではないだろうか。現在は数軒のモーターと土産品店があるのみだが、トルコの第一級の観光地であることには変わりがない。王国が滅んだ後も“綿の城”は相変わらず多量の温泉水を吹き出し続けて自身を成長させ、2000年前よりもさらに華やかになって多くの観光客を集め続けている。古代の王や貴族が疲れを癒したのと同じ温泉で旅の汗を流すのもまた格別である。

＜川の堆積作用＞ エーゲ海南部沿岸のエフェス(エフェソス)は世界七不思議のひとつアルテミス神殿のあった所であり、聖母マリアが余生を送った教会が残っているキリスト教の聖地でもある。貿易港として紀元前1000年ころから発展したが、この港の歴史は小メンドレス川によって運ばれる土砂と人間との戦いの歴史でもあった(図1)。2世紀ころには港が埋没して使えなくなり、繁栄の終わりを向かえた。たとえ穏やかではあっても無限に続く自然の営みに人間が屈した見本である。蛇足であるがメンドレス川という名は蛇行を意味する英語“meander”の語源である。

＜金＞ アンカラ市の西ポラトルの近くには3000年以上

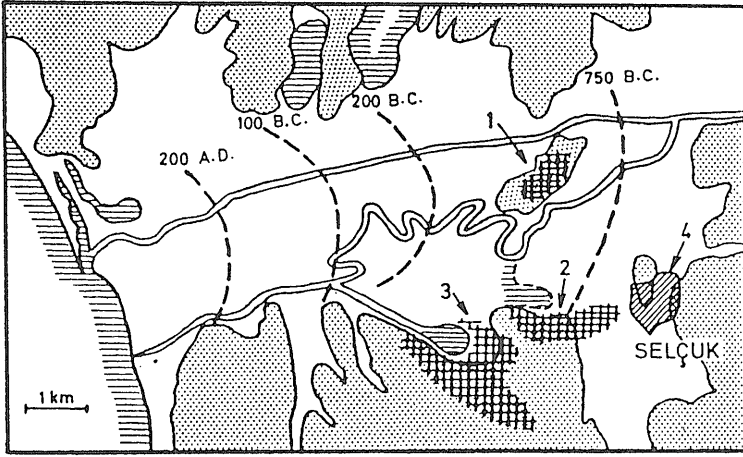


図1 小メンデレス川の堆積作用による海岸線の移動 (Eisma, 1962による)
 1=900-600 B.C. の湾内の小島上の集落
 2=600-300 B.C. のイオニア人の市トラキア
 3=300 B.C.-500 A.D. のエフェソスとその港
 4=500 A.D. 以降のセルジュキア (現セルチュク)

前に西方より移動してきたフリギア人の王国ゴルディオンの遺跡がある。 解いた者はアジアの王になれるという綱の結び目をアレクサンダーが刀で切断したという話は聞いたことがありと思うが その結び目 (ゴルディアン ナット) はこの国の王ゴルディオスが結んだものである。 神に頼んで 手に触れるものすべてが金となるようにしてもらったミダス王もまたこの国の人であった。 王が自分の過ちに気付き この魔力から逃れるために身を清めたというパクトロス川には今でも砂金が出るらしい。 この地より西のエーゲ海沿岸一帯は古いオフィオライトの分布する場所に新しい火成活動が起こった地域で Sb, Hg, As 等と共に Au, Ag の鉱脈鉱床が存在する。 この点では北海道の北東部やカリフォルニアのマザーロードに似た地質である。 同時に先に述べたパムッカレを含む地熱地帯でもある。 これらの

鉱床と90度C以上の温泉の分布域はどちらもほぼ新第三紀の貫入岩の分布域に一致している。 パクトロス川の砂金も金鉱脈がオフィオライト中の超塩基性岩の何れかに由来するものだろう。 かといって人間の愚かな欲望を戒めるこの寓話の価値が失われる訳ではない。 かつてのオスマントルコの威勢がどの程度のもだったかを知るにはイスタンブールにあるトプカプ宮殿 (現在は博物館) を訪れるのが良い。 宝石・美術品類は勿論すばらしいものであるが ここに保存されている金の量は途方もないものである。 現在の小アジアつまりトルコにはあまり大きな金鉱床は見あたらないのに何故これだけの金を集められたのだろうか。 力づくで世界中から集めたのか それともかつては領土内に多量に存在した金鉱床を掘り尽してしまったのか 一地質家に答えられそうな問題ではない。 しかし トルコ各地には何時ごろ

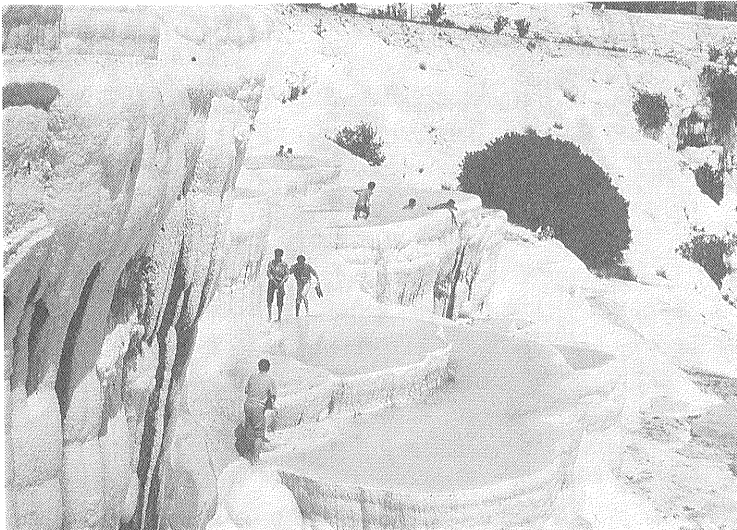


写真3 パムッカレの石灰華

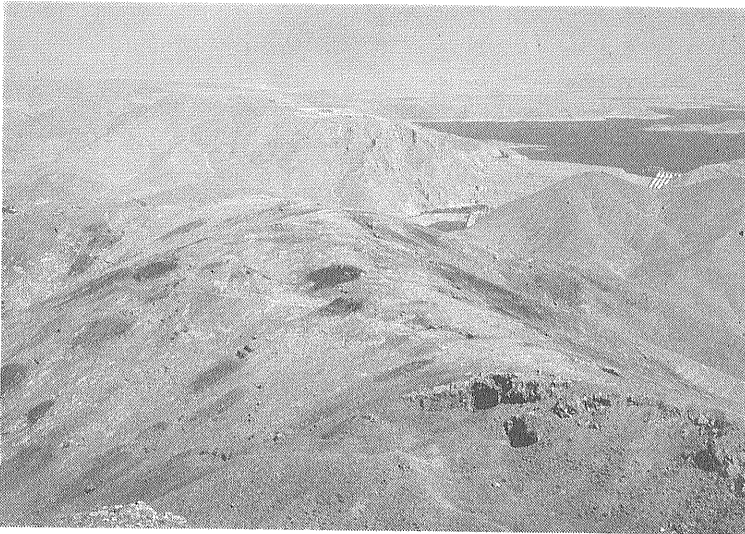


写真4 ケパンの狸堀鉱山跡
遠方に見える湖はフィラト川
(ユーフラテス川上流部)をせ
き止めた人造湖

何を採るために掘られたか不明の鉱山跡が無数に有る(写真4)。考古学者によれば千年以上前のものも珍しく無いという。今その跡を調べても酸化した鉄・銅・マンガンなどが認められるもの、鉱石らしいものはまったく見られないことが多い。おそらく奴隷等を使った人海戦術で金のみならず銅・鉛・亜鉛等の鉱石も一かからも残さず採り尽くしてしまったのだろう。卑金属

も昔は貴金属であったのである。

〈窯業原料〉 同じボラトルからエーゲ海沿岸にかけては昔から窯業がさかんである。この地域には堆積性あるいは風化残留性の良質な粘土鉱床が多く、古くは先に述べたトロイの日干煉瓦から、高度の技術と芸術性を誇るキュタヒヤ焼きなど多方面に利用されてきた。中でもブルサ市のオスマン廟などに使われている青色のタイルは素晴らしく(写真5)、トルコ各地の歴史上の重要建築物によく用いられているが、現在ではその正確な製法が不明と言われる。一方、現在のトルコは世界のほう素の25%を産出しているがそのほう素資源の大部分がこの地域に存在している。ほう素はガラス産業・窯業・原子力産業(中性子遮閉壁用)などに欠くことの出来ない元素であり、歴史上のみならず今後のセラミック産業にとってもこの地域は注目すべき存在となっている。

〈鉄〉 紀元前2000年ころには世界史上初めて鉄を使用したヒッタイト人がアナトリアに移動して大帝國を築いた。紀元前1286年には現在のトルコとシリアの国境に近いアンタクヤ市付近でエジプト軍と戦い、これをうち負かしているから鉄器の威力は絶大なものだったのだろう。彼らがアナトリアに多量に分布するオフィオライト起源のラテライトあるいはその二次堆積物である砂鉄を用いて製鉄を行なったことは間違いあるまい。つまりヒッタイト帝國がアナトリアで栄えたのはそこに鉄鉱石が有ったからである。

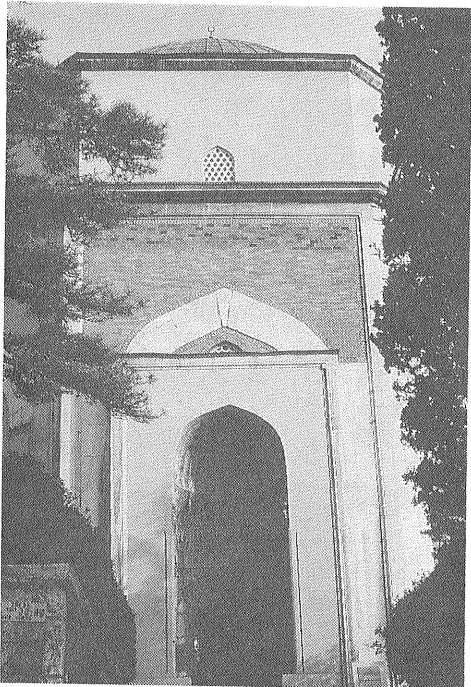


写真5 オスマン廟の正面を飾る青タイル(ブルサ市)